

川柳の雑誌

★ 兵士は戦線に！ 我等は銃後に！！ (國民精神動員)

麻生路郎 ★ 編輯



園

13/10

177

第五十卷 第十號
每月十五日發行

川柳雜誌社發行

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十三年十月十五日發行
第十五卷第十號(每月十五日發行)



菊正宗

店商納嘉本 株式會社

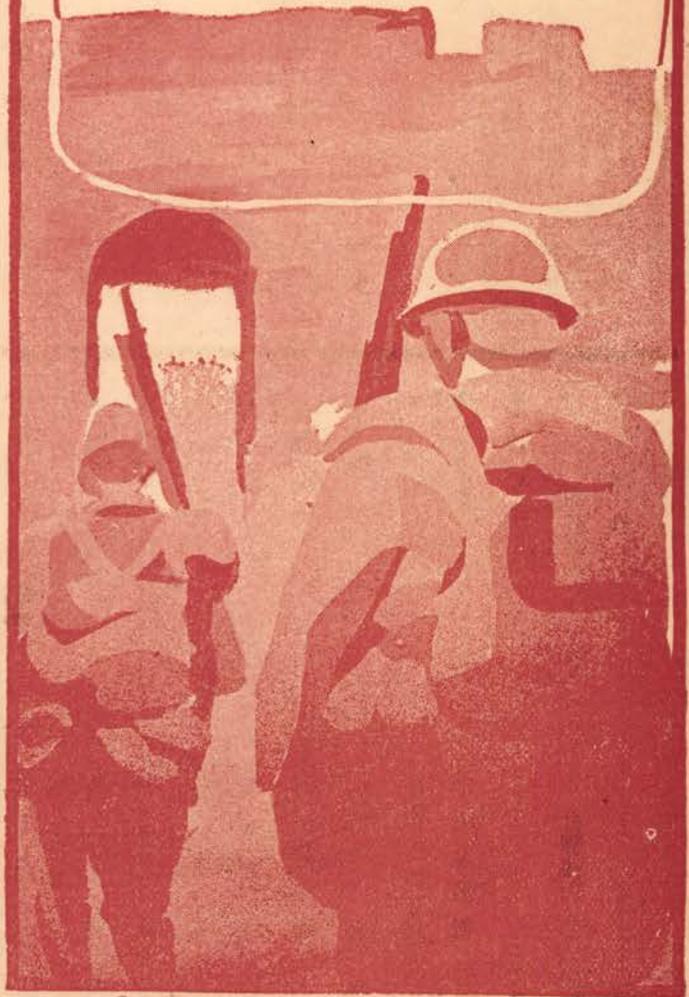


戦線へ
慰問品

猛暑の戦線に献身活躍せらるゝ皇軍
勇士の御辛苦に對し、感謝の赤誠を
籠めて慰問品をお送り致しませう

適切な品・種々取揃
二階・慰問品賣場

大阪 三越
高麗坂



のた
めに

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

片瀬醫學博士述

「安産のために」冊子呈上

梅林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査



フダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

川柳雜誌

第十號 第五十卷



路郎主幹を 異境へ送る

吾が社は曩に、麻生路郎主幹を滿鮮川柳行脚に送り、今又同主幹を北支及蒙疆の旅に送つた。

時當に支那事變の只中、忠勇なる皇軍は漢口攻略戦に、山西掃蕩戦に、勇奮その戦果は日々に擴大し、占領地域は新文化建設に百年の大計を樹立せんとする。此の時此の折、占領日尙ほ淺く、匪賊化せる敗敵の横行なきを保し難く、剩へ氣候風土異なる異域の邊土に足跡を印せんとする主幹の意圖や正に壯とすべきである。

今次の旅行に於ける主幹の抱負は、只に川柳行脚に止らず、轉々皇軍奮戦の跡を訪ね、北支蒙疆に於ける民情世態を視察し、主幹一流の觀察を遂げ、新文化へ、又邦人の大陸進出に貢献せんとするにあるを想像する。

九月十八日正午、扇港第一突堤は、多數柳人の歡送裡に、壯途の主幹を乗せた黒龍丸は纜を解いた。此の時、主幹の温顔にも、意氣正に征途の勇士にも劣らぬものが見受けられた。旅程は約一ヶ月の豫定、吾等は大成功裡に無事歸朝されん日を期して待つものである。(艸樂)

川柳雜誌

十月號
目次

表紙……柴谷宰二郎

十月のケンアト

留守番を
あが
し
す
か
？

- ★ 沖野岩三郎……(六)
- ★ 池澤樂居……(六)
- ★ 塚越正光……(六)
- ★ 酒井大樓……(六)
- ★ 堀口塊人……(六)
- ★ 榎田竹林……(六)
- ★ 濱田久米雄……(七)
- ★ 長野文庫……(七)
- ★ 藤村誠一……(二)

現代
川柳人の覺悟

藤村誠一……(二)

詩人
複眼
後姿の表情

高鷺亞鈍……(六)

路郎主幹を異境へ送る

西田艸樂……(一)

武玉川三篇研究(三)

森東魚……(一〇)

秋の藥草の句なき

西田艸樂……(四)

大人の嘘

奥村丹路……(九)

初・秋・斷・片

久留美……(八)

鯨が泳いでる

須崎豆秋……(八)

近作柳樽

麻生路郎選……(八)

川柳塔

諸家……(四)

一化粧

高橋かほる選……(三)

集路一
寫眞機

岩崎柳路選……(三)

各地柳壇

……(四)

後記

社關係の人々(表三)

柳界展望

……(三)



現代
川柳人の覺悟

藤村 誠 一

知識人と民衆

ひと頃、知識人の間にシエストフの哲學「虚無よりの創造」や「悲劇の哲學」等が流行し、その頃の合言葉はシエストフ的の不安と稱する、不安とか焦燥とかいつた暗鬱なものが漲つてゐた、ではそれは何がための不安であり焦燥であるか、といふことを今此處でつとり早く言へば知識階級の現實生活の無能力からくる生存の不安であつて、下宿の二階に寝轉んであれこれ前途を思ひ患ふところの一種の憂鬱症のやうなものであつた。つまり彼等が學生時代に受けた教養の非實用的な齟齬からくる思想の破綻が、やがて容赦せぬ現實の嚴しさに身の置くところもなくつひに絶望の虚無世界を彷徨するといつた具合であつたのである。

然し乍ら、其後、邦國に勃つた内外の激變は、漸次彼らの惡夢を稀薄にせしめた。あの五、一五事件は今後の日本の行く道を豁然と示し、滿洲事變は彼らインテリの失業救済さへ促進せしめたのである。これらは、やがて、彼らが頭だけで、いはば觀念のみで判断してゐたものからは邦國の現實の動きは余りに懸絶してゐたし、而もその全き不動の立法に於て驚ろいた。そこで彼らが少しづつ、曾ての自由主義的傾向から抜け出し、日本とその土地に認識を求めやうになつて來たことは寧ろ奇妙と言へば奇妙であつた。何故なら彼等は日本人であり乍ら、餘りに日本と日本人を知らなすぎたからである。

思想界に於ける民衆問題が取り上げ得るやうになつたのも實はその頃からで、彼ら知識人が民衆

の一員としての自覺を持たねばならぬといふことはそれは取りも直さず、その民衆の棲む或ひは生活する爲の郷土、血族、民族全體への問題であつて、吾々の場合は吾々日本の土地、風俗、傳統や、國家意識等の認識こそ必需となつてきたのである。故に文學は文學のための文學から民衆の文學となり哲學も、科學(醫學)も民衆のための哲學であり、科學である方向へと、昨年から今年にかけての動きを見せるやうになつた。つまり、夫れらが民衆のためと言ひ條、畢竟するに現在する日本及び日本人のためであり、それは國策に沿ふといふ限定があるのは此の場合、くどく述べる必要もなからう。

以上は甚だ、皮相的な、大ざつばな觀察であつた。だが大體に於て、知識人といはず思想界全般の流れが、民衆の問題を究めつゝあり、彼ら自身が既に民衆の一員としての自覺を持つやうになつたといふことは解つて戴けたと思ふ。然らば、彼らが現在如何なる方法によつて、如何なる文學、哲學、科學的系統づけつゝあるかを紹介することが出来れば、讀者は完全に了解されるであらう。だが残念乍ら私の淺學非才を以てしては到底それらの一つ一つに就て語ることは不可能であるし、第一今回投稿した私の意圖からも遠く外れることになる。そこで、只單に諸賢と共に最も關心深い筈の川柳文學を取上げて暫く考へてみたいと思ふのである。

知識人に對する川柳人

最近、川柳が勃興してきたことは事實である。

「番傘」主催の全國川柳大會は、中之島大空堂を埋めつくす柳人達を、よく集め得たし、その中繼放送は一般庶民の聴取するところとなつた。又昨午暮の「川柳人協會」主催の、師走川柳大會は、朝日ビル樓上に於て、これ又多數の斯道の人達が集した。各社の月例句會、或ひは全國に散在する多數の柳話等、全く川柳の隆盛を思はすものがある。而もそれらの隆盛が、大部分、若い人達によつてであるといふこと、そしてより注目すべき事は、漸やく知識階級を迎へるやうになつて來たといふ點である。

だが、それはまだ、知識階級の一部にのみ止まつてゐるのであつて、決して俳句や短歌の如く旺であるとは言へないのである。これは吾々にとつて遺憾に思ふ點であるが、從來鼻にもかけてゐなかつた川柳を兎も角も、インテリが關心を持つやうになつたといふところで一應は満足して可いだらう。

さてこれらの原因が、川柳の社會化運動による結實であるかどうかは暫く措き、少くとも現代川柳が狂句などと根本的に相違したものであることが一般に理解されてきたのは見逃すことのできなないものであるとして、もつと切實な理由は實に彼ら知識人が、前項に述べた如く、民衆の自覺によるための現代川柳への關心であると私は信じ度いのである。川柳が知識人の對象になるには、川柳はいまだに低徊趣味であり、下劣であり、野卑極まるものであることを慨嘆する者である。知識人を迎へるための體裁を保てと私はいふのでない。知識人をすらすら満足し、索引せしめ得る丈の、藝術的氣品と、人間性の指導性乃至、倫理への探求を目指して欲しいとさへ念願するのである。

愚考する限り、私は川柳は俳句や短歌などよりもつと、邦國にあつては上位の文學であり、且つ最も隆盛である可きであると信じてゐる。然るに依然、それらの短詩型文學のうちで川柳は最下位にあり、日本文學史上からは、川柳のみ、殆どオミットされ勝ちであり、文學史の圏外にさへあることへの憤懣は何處へもつて行く可きであるか。しかし省みれば凡て、川柳が、川柳の存在理由

を、民衆の遊ぶ花札程度に單なる手慰きみとして軽く取り扱つた從來の川柳家それ自體の罪であるとは私は考へるほかない。私は川柳を民衆の手に届かぬ高い文學的位置に押し上げやうとは思つてゐない。川柳は何處までも民衆のものであり、民衆の側にある可きであると、信ずる。だからと言つて、決して民衆の惡徳に利用され得る不健康な川柳であれかしと願つてゐるのでは毛頭ない。

惟ふに川柳家には、川柳を作る作品本位で進む者と川柳の文獻の好尚趣味を滿喫する所謂、古川柳研究を勉む者との二種類あるやうである。前者はたゞ衝動的、思ひつきの本能で作る自然發生的作爲は結局、川柳發生當時そのまゝの社會觀乃至道徳で、原始的、野蠻的、自慰行爲をして敢て恥じない者であり、後者は、古川柳を通して、その時代の風俗、習慣、言語を究めてみたり、或ひは醫者は、古川柳の中から醫術を拾ひ、藥屋さんはその時代の藥石を研究したり、辯護士は古川柳に表れた法律を研究するなど、それらは結局、川柳それ自體の研究でなくて、川柳を通して何かを研究するといつた川柳を方便に使ふ、端的に言へば川柳そのものゝ冒瀆を敢てする手合であつて、結局彼らは、眞に現代川柳の發展と向上を圖るより却つて後退せしめ、結滞せしめるでしかないのである。然るが故に、川柳が、俳句や短歌より、いつまでたつてもうだつたあがらないのは寧ろ當然であつたと言はねばならない。

其處で吾々は、眞面目に、吾々の川柳を、換言すれば民衆の一員である知識人も含めていふ自覺から、ベルグソニズムをもつて言へば生成發展する具體的人間存在の實存的立場より、川柳を眞に人間性に即した必然的カタルシスとして展開すべきであり、さういつた川柳理論、主張、研究の輩出こそ望ましいものであると私は考へる斯くて知識人の川柳熱は偶然でなく、彼らも亦やがては川柳家の自負をもつて、よく對外的に敢然闘ふ事も約束されやう。知識人は弱體、微力に見えてゐて、よく世間の輿論は彼らによつて惹起される。吾々は知識人を迎へるに際し、これ丈の用意を持つ決意がなければならぬのである。

川柳と民衆の言葉 附 翻譯川柳への愚見

私はある有名な先輩詩人と談合し、話題、たまに、餘技に及んで、私は川柳を語り、敬愛する唯一の柳人との交際をも語つた。ところが意外にも彼は奮然、怒つて曰くに、川柳なんかに凝り、川柳家とまで付き合ふとは怪しからん。君は墮落したよ。と、そこで今度は私の方が、肚を立て、きた。さうですか、私は貴郎みたいに宇宙を馳けまわつてゐるベガサスとは違ひます。といつて喧嘩をしてしまつた。斯のやうに、川柳や川柳人が文人連中では、つまらないものゝやうに考へられてゐるのは、彼らの現代川柳の認識不足もあるが然しその責任は前項に述べた如く、全く、川柳家自體にもあるのである。前田雀郎氏が、芥川龍之介が川柳を理解し作句したことを書いてゐるが、芥川龍之介の著作に、川柳作句は抹殺されてゐるし、吉川英治が川柳家であつたことは、川柳人は問題にしてゐても、英治本人は問題にせず、とつくの昔に忘れてしまつてゐる事など考へ合せば、何れにしても、川柳は文壇外のものであり、彼らが川柳を口にするにすら、ある種の恥辱すら感じてゐることは何たることであらうか。そこで私は、この最後の項目にあつて、川柳そのものゝ公道と正統を匡し、川柳家を宣揚し、誇り、以つて川柳家諸氏をして鼓舞することを得ば幸ひ筆者の望外とするところである。曩に私は川柳が俳句や和歌などより、もつと邦國にあつては上位の文壇であり、且つ最も隆盛である可きだといつた。然りである。

何故ならまこと川柳こそは唯一つの邦國生粹の日本文學であるからである。例へば俳句は佛教思想の影響を受けて存続した、否佛教哲學と不即不離の關係のある文學であるし、和歌は儒教の渡來によらずして發生しなかつた。換言すれば、俳句や短歌はその原因を印度、支那の文化思想を邦國に植へつけたものであるに反し、川柳こそは全くそれらの思想を藉りずして邦國傳來の民衆の精神から發生した文學であつたのである。川柳が土俗的血族的な民衆文學であつたことは、全く邦國を外して川柳藝術の樹立の不可能であること、阿部佐保蘭氏の翻譯川柳の多難すら思はずのこと、吾々としては、出来れば、日本古來の武道である劍術や柔道が、斯界の人達によつて海外の碧い眼玉を東にしたところで、ヤア、ウンとやつてみせる如くに川柳を披露したきはやまやまであるが、悲しいかな一それ程でもないが川柳は文字藝術であり、殊に民衆の言葉で書かれてゐるといふことその民衆の言葉を用ひずして川柳の味得は絶対に解し得ぬといふ點に、日本人以外の人種の蟹文字に翻譯出來ないのである。それに劍術や柔道の如く、その武道精神はやはりスポーツとしての勝敗にかゝるものであり、着用する具足その他は視覚によつて、ほゞ自國のフエンスングやレスリングと比較照應されて大體の納得はつくが、川柳は日本語を知らぬ外人には全然讀めぬは勿論、讀み得たとしても、その内容は全然味へない目明き言でしかないのである。つまり川柳は日本語を離れて川柳は無く、その日本語も民衆の生活、風土、習慣、血族をその文字の内容とし、内容の按配と意味の構成によつて醸し出される日常性の味得、感

得、知覺、直覺すること肝要であつて、万一川柳が外人が解せんとするなら、その翻譯でなく、解説でなく、グレン・シヨウ氏の如く、日本の土地に遊び、日本人さながらの生活を體驗し、而も日本人になりきつて始めて、幾分了解し得るのである。然るに一方俳句や短歌などは川柳と違つて、翻譯して、ある程度し得るポシビリテイがあるのである。或ひは語韻、風韻、韻律などの持つ邦語のニユアンスそのまゝ翻譯するとは不可能ではあらう然し乍ら、俳境なり、短歌の精神は、外人にも了解しえられるのである。例へば俳句は、最近の「ホト、ギス」に見る如く、虚子の句は毎號各國語に翻譯され、又海外から横文字の俳句も寄せられてフランスのクシュウ始め、多くのハイカイ詩人から輩出してゐる。又短歌は、外人の日本文學研究は、直ちに万葉集が繕かれるといふことは、外人にとつて和歌のロマンチズムが共通するからであり、そしてつまり万葉集から入ることが、彼らは容易に日本文學を入門し得るのである。或ひは石川啄木の歌なども各國語に翻譯され、外人の啄木ファンさへあるのをみて、これらの翻譯可能と成功を知ることが出来る。

では何故、俳句や短歌が、その邦語を離れても(形式を離れても)内容を解し得るかに就て一應の研究をしてみやう。もとゞ東洋思想、殊に印度思想は、よくフランスのサムボリズムに相通ふものがあつて、最近の純粹詩などは俳境と同じ絶對境の具現であり、又獨乙の新興哲學であるフツサールの現象學は東洋の禪の研究であれば、獨乙人がこの思想を究むことも亦可能なわけである。又支那の孔子、孟子老、莊などの教へは、よく歐洲人の凡ゆる著書に引用されてゐることは、よく支那の思想に彼らが通じてゐることを意味するものであつて、昨年コレッヂエ・ドゥ・フランスの教授に就任した、ポール・ヴァレリイ氏の詩學講座第一席に孔子の言葉の引用がある等は最近の例であらうと思ふ。斯のやうに、俳句が印度の思想を受けつたものである限り、和歌が、支那の思想を受けつたものであるとも、如何に日本化した文學形態を探つてゐるやうとも、一まづそれを解體し、翻譯して、他國語にする場合は、その内容の共通性によつて他國語に理解し得るのは、これで明確されたと思ふ。いはば彼らは日本の俳句や短歌を文學に於ける劍術や柔道の如く彼らの生活環境に適したレスリングなりフエンスングなりのテクニクとルールに嵌めて、その内容を體得し得たのである。

擬而吾々は川柳がこのやうに翻譯し、外人に理解されぬ事のために何等、肩身を狭くして卑下することもなければ、悲觀するに及ばない。吾々が川柳するに於て、フランスの曾てのモラリスト批評家だつたアナトール・フランスの如く、又ロシアの詩人アウシキンの如く、自國語を限りなく愛し、どこまでも民衆の言葉で、フランス或ひはロシアの民衆を綴つたやうに、吾々も亦民衆の言葉で民衆を綴ることによつて、彼らが不朽のフランス文豪として、又ロシアの眞實の詩人として名を残した如く、邦國の川柳人として存在すること、それは時代の推移、流行の變遷を問はず邦國と共に名をのこすものであることを確信して可なりである。以上もつて現代川柳人なべての覺悟を促したい所以であつたのである。(元)

あらゆる趣味のお稽古場

手ほぎから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

松坂俱樂部

會員募集

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生 擔當

御申込は 七階 松坂俱樂部 へ
電話 三〇〇三(表代) 番三

松坂屋

大阪 日本橋

お稽古
種目

- 長津鳴 尺八曲
- 常磐 舞踊
- 清元 謡曲
- 小唄 小鼓
- 鳴物 能樂
- 尺八 曲
- 舞踊 八曲
- 謡曲 八曲
- 小鼓 曲
- 能樂 小鼓
- ピアノ 樂
- 聲道 樂
- 書道 樂
- 茶本 道
- 華道 樂
- 料理 道
- 洋裁 道
- 川柳 道
- 氣道 學
- 棋道 學
- 松坂屋 所
- 吹込 所



川柳塔

路郎選

大阪 高橋かほる

郊外の二階勤めに行く支度
餞別を渡すに人目憚かられ
出帆へ銅羅の音色が面色く
暑そうに入場券を渡すなり
せつかくのカメラがもちの若旦那

大阪 水谷 鮎美

かほちや煮くこまが好きな妻となり
島の内お師匠さんも瘦せてゐる
シグナルは青だテロなき考へず
花鉄父の氣性にそぐはぬ日

大阪 姫田 夕鐘

長期戦七分搦八分搦なき言ふこれす
朝顔の水ぢやまくさい秋彼岸
西瓜か、へて子の體重を考へる

〇〇 市場 渡食子

知る人ぞ知る一線に立つ汗を
蠟燭の下で故郷からの消息よむ

特務兵に齒科醫京大出の學士
父の夢子の夢醒めりや不寝番
秋深し第一線の野も山も

名古屋 吉田 水車

千人針こ、ぞ女の意氣を見せ
銃劍もペンも長久祈るなり
硝煙のすき間に仰ぐ秋の空
井の数が足らない子澤山

大阪 大西 八歩

あきらめて風の心になつてゐる
ルーデエようやく夜の感傷にあきんさす
夏去れば秋のたもこ、なるもよし
打水の素足にふれた秋の風
見送りの丙種の旗の眞劍味
見つめれば弱さのにじむ後つき
個性なき持たず金魚の軽ふ浮き

大阪 須崎 豆秋

千人針宗右衛門町は更けてゐる
男衆を待たして千人針を縫ひ
皮膚病になつた云ふて犬を捨て
いつしか秋で坐つて居たり
體溫器見い／＼酌いで貰ふなり

大阪 西 いわを

商人の前だ威厳を落すまじ
受付に花あり猫の花瓶なり
挨拶の芝居がかつて面白し
人名簿我が心境に合はぬ人
國策の線に沿ふて買はされる

大阪 後藤 青兒

弾力の無い寢臺で覺悟する
驛々は勝つて来るぞ「赤禱」
秋風に塔の崩れた日の記憶
長期戦何ぞ大地に響く下駄

〇〇 宮岡 白峯

高射砲あの山里へ伸びてゐる
軍用車眞赤な夕陽受けて行く
寝て起きて寝ても雨なり暮舎なり
俸給も貰ひ疲れても貰ふ晝

松本 石曾 根民郎

店に陽はさゞき利潤を思ふてゐる
征くひさの影かさなれば蜻蛉立つ
いさかひを消して箸さるか夫婦



秋の薬草の句など

名に愛でて

西田 艸 樂

秋の薬草についてその川柳記事を書けとの仰せである。毎月本艸會といふ會の催しで、所々方々の採薬行や植物研究に参加してゐるが、勿論有効植物の研究が主で、その畑の者でない興味は薄いし一つの學問となると冷たい感じさへあるので、山路行くさに、目につく草木、これは何科に屬する何々で、何々の成分を含み、何病に有効であるといった事を、一々考へてゐた日には、行樂が目的のハイカーの様に氣樂でない。

併し私には他の一行の連中と違つた樂しさをそこで味ふ事が出来るのが嬉しいのである。それは草木の名の面白さや、それらが文學に交渉を有つてゐる事が、林の中で、谷間の底で、一草一木から文學が味はへるのが言ひしれぬ樂しさなのである。

名にめで、折れるばかりぞ女郎花

われ落ちにきと人に語るな
僧正遍照が馬から落ちたそこに女郎花が咲いてゐた。落馬したのではない名が面白く折取らんばかりだと強辯したので、

花より外知る人もなし御落馬

口どめをきれいにされた女郎花

面の皮厚く名歌が一首出来

花もの言はねど落馬人が知り

ど、めたは乙女落ちたは女郎花

こんな古句が十四五句もある。

僧正遍照でなくとも、名に愛で、折りたき草花が、山路には澤山にある。

ひとりしづか、ふたりしづかなどいふ草がある。此の草を見る毎に謡曲二人静を詠つて見たくなるし、きせわたといふ草花を見ると謡曲狸々の「着せ綿を温ためて、酒をいざや酌まうよ」と節づけで知らず識らず吟さむのである。

廣い葉の眞ん中に置き忘れた様にぼつんと一つ、丸子が乗つかつてゐる花いかだ、葉の中央に花が一つ咲くところから附けられた、名も面白く、姿も面白い。

金借りに出れば行軍迫りきて
疑へば背冷やかに炬燵酒

大阪 中西 おさむ

母はもう冬が氣になる綿ほこり
シャンブーへ我が娘の肌の艶を見る

大阪 加藤 ライト

顛髻をなで謙信の詩を吟す
子等よ歎され父が兄が残せし土ぞ

大阪 加藤 ライト

漸つ之間に合うて代表汗を拭き
女文字妻は倍氣の封を切り

大阪 正 本 水 客

見舞品水も通らぬ枕元
秋風へ仔犬ちひさく吠えてみる

豊中 黒 川 紫 香

池の色ボートの底にさはるもの
身勝手な話聞手の腹がへり

大阪 丸 尾 潮 花

焼香の順番腕をつゝかれる
おじぎしたおかつば髪をふつてゆき

大阪 丸 尾 潮 花

電柱がつゞいて次の村さなり
足折つてしてもて蝗にふびんが出

大阪 丸 尾 潮 花

心ではもう添ひさけてるふたり
弟の露營にすまぬ夢を見る

大阪 丸 尾 潮 花

縫ひあけて母は秋くる窓にゐる
晝飯をよばれる傍へ猫が来る

大阪 丸 尾 潮 花

子の病氣信心のない所爲にされ
御苦勞さん夜警の廻る靴の音

大阪 丸 尾 潮 花

せつかちな自分を笑ふ忘れもの
雑踏に離れこむない手を握り

金澤 安川 久留美

復興に水禍なげかぬ顔さ顔
戦争だ火事だお酒に水を交ぜ

金澤 安川 久留美

洋服に利久漫書の世が動き
代議士の髭にも豆の露がはね

松山 酒 井 大 樓

男の襟必ず剣舞のみでなし
飛行場へ犬もローラを曳くつもり

松山 酒 井 大 樓

四書五經減んで五逆のみの支那
小乗の論へ町内揉め続け

大連 佐々木 三 福

秋の訪れ待ち兼ねる脂肪過多
合着合帽さ銃後のおごり沙汰

大連 佐々木 三 福

誇大廣告國策の裏を行く
振舞茶一ツ溢るゝ人間味

大連 佐々木 三 福

秋の風硝煙の地に早く吹け
虫一つ海の彼方も秋である

大連 佐々木 三 福

郷愁もふつ飛んで行く巨砲
秋の蝶異國情緒の氣に疲れ

大連 佐々木 三 福

父も醫者も無用畜生子を育て
母の死に試験の夢を今に見て

大連 佐々木 三 福

秋風へ欣然さ出る宮参り
食慾の秋へ牛肉屋で御座る

大連 佐々木 三 福

名も面白く、姿もよく、その上萬葉集や古今集に詠まれた、昔懐
しい草木は野にも山にも満ち満ちてゐて、私共噛ちりさしばかりで
何の造詣もない者には、植物研究家になじつてこんな事を樂しみに
する事が多いのである。

秋の薬草

さて秋の薬草に關する川柳となると、これも數限りがないし、最
早紙面も大分塞いだ様で多く書くよゆうもなさそうである。
桔梗は根が咳薬になるが、川柳では太田道灌の定紋を詠んだ、
江戸紫の下染は桔梗なり
道灌の頃も桔梗は丸の内
などの句や、明智光秀の定紋がやはり桔梗であつたので
洛中で桔梗の花が三日咲き
桔梗をば三日ほどにて染めてやり
等々、花そのものを詠んだ句が少い。
葛もその根が名薬葛根湯になるが、葉が風に戦いで、裏が白く遠
目に光るので、裏見葛といつて和歌に詠まれる處であるが、句では
玉にくらぶれば葛は地者なり
の玉藻前と葛の華狐の比較した様な句でつまらない。
また、びの實は秋成熟するもので薬種として猫の良薬とされ、何
も食はぬ病猫もこれを與へると喜んで喰ふので、これは古句にも、
猫を抱いた薄雲太夫の繪にかけて、
薄雲の禿またたびくんなんし
といふ句がある。

五倍子、これが時局柄やかましい問題の品で、ぬるでの木の新芽
に昆虫が卵を産みつけて病的に出來たものだが、これに三十二品目
の使用制限をされてゐるタンニンの原料で、初秋の頃採集するが、
多く支那から輸入してゐた。今輸入難で困つてゐる。昔の婦人がお
齒黒をつけるにならぬフシの粉がそれである。
淺草の三十六軒茶屋のうちに五倍子見世があつて美しい女の子を
店頭に出して置いた。田舎侍が用もないのに立寄つて、わざと五倍
子を買つた句が相當に多い。
五倍子をも一袋たもれと腰をかけ
五倍子見世に小半日あるたはけもの
類似の句をはぶく。
まだあるがこれ位にして置かう。

急 告 !!
近頃ワレタ場合に役だたぬニセ
モノをサン硝子として販賣する
店が有ますから御買求の節は是
非SUN金文字入眞正品と御指
定下さい
有全國時計店・百貨店
大阪日本橋五 小西光澤堂 本店

SUN

三重硝子
専賣特許・新案登録



★十月のアンケート ☆ 沖野岩三郎・池澤樂居・塚越正光・酒井大樓・堀口塊人・榎田竹林・濱田久米雄・長野文庫

沖野岩三郎

○ 此の夏信州の山荘で、二十日間たつたひとり留守居をしました。その時長い梯子で松の木の枝をきりに上りました。家内がみればなかなかゆるしてくれない危険をおかしてやりました。

塚越 正光

○ 先日の防空演習に銀座で二時間も吹きさらされて、すっかり風邪を引きこみ、寝たり起きたりの私は、別に無理をしたとも思

酒井大樓

○ 雨しとくと降る留守居の退屈さに作句でもと思つてノートを取出した處へオイ居るかと来たのが基敵のK、下地は好き

つて居る。男らしくないとは思ひながらなしよの書出しをみつたりおつりの五錢玉を發見

退屈させません。

か私は忘れてしまつたが、ずつと以前観た日本映畫で、故郷の漁村で戀愛する二人の若い男女のうち、女の方が何かの機會で、都會を憧れて東京に上つた。男は、そのあとを追つて上京し、自動車の運転手になつて、その愛人を捜し求める。或日一組の男女の乗客を拾ひ、ふとバックミラーに映る女の顔は、まさしく現に捜し求めてゐる愛人であつた。この場面の撮影はタクシ

そのきずが今になほりません。毎日家内(妻)に、オキシフルで拭いてもらふたび、デルマトウゼをつけてもらふたびに、笑はれてゐます。誰も干渉する者のない仕事は愉快です。けれども調子に乗りすぎる恐れがあります。

池澤樂居

○ 新世帯の娘の内へ空巢ねらひの注意をしてやる積りで立寄つたところ早速市場へ買物の留守



で、私が寝込んでゐるとすれば勢留守番をする率が多いのは自然だが、さて斯うやつてラヂオを子守唄に、うとくとしかけると、入口ががらりと開い

て御用聞、屑屋、電氣、瓦斯、水道と次々にやつて来て、とても夢路を辿らせては呉れない。してみると女房なんて、常は晝寝も満足に出来ないと思える。

留守番をした事が



堀口塊人

○ 妻子を銭湯へやつた後で、何



詩人複眼 (6)

高鷺 亞 鈍

後姿の表情

私は人間の後姿ほど印象深く惹きつけるものはないと思つてゐる。臍は口ほどに物を言ひ、といふのがあるが、後姿は顔ほどに表情を持ち。と言ひ換へても過言でない。だから映畫では多々に俳優のお尻を殊更に観客の方を向けさせる演技を用ひることに腐心してゐるやうである。例へばチャップリンの映畫

はラスト・シーンに必ずあの特異な後姿をみせて向ふの方へとぼとぼ歩いてゆく。そしてチャップリン獨特の哀愁を咬らすのである。「モロツコ」のラスト・シーンはアイトリツヒが愛人に扮するクーパーのあとを追つて熱砂を踏んで突き進んでゆく場面、その時のアイトリツヒは決然たる意思をその後姿に見せてゐたのは讀者も印象に残つてゐるだらう。どんな題目だつた

ありますか？



の居ない事を感じてはゐながら、お母アちゃんの事を口にするのが何か怖くて口にしないやうな痛々しい素振が見えるので

す。女中達も可愛想になつて、背負つて寝かしましてといふ事になり、背負つたがなか／＼寝

機嫌とりにお江り台や玩具を買つてやつたが、いつものやうに

朗かなター坊にはなつて呉れない。時間つぶしに停車場へ行つ

て汽車を見せたり、おしまひには吞兵衛へ出かけてター坊の好

きな玉子焼やら何やら食べさせて、たゞ／＼眠くなつて呉れる

たが、とても寂しさうな寝顔でした。

濱田久米雄

娘と二人で、といつてもまだ

六十日にならぬ赤ん坊だが、秋晴れの日曜を留守居。家内は婦

人會の努力奉仕で近所の國婦連と小學校に行つてゐる。赤ん坊

は先刻貰つた乳の威力で天下泰平の相で寝てゐる。ラヂオの朝

の音楽が近所から洩れて来る。これだけでは至極平和な留守居



を興へるものか。僕も小さい時は相當たゞかれたものだらうが。又これは昨日貰つた編輯局からの返事の好材料になるなど

に考へる。ラヂオは子供の時間に移つたらしい。が、うっかりスキツチを入れて起きられると困るのでやめにする。いざ破顔

大泣の段になると男親はせい／＼馴れぬ手付きで抱き廻るのが關の山だ。子守唄もまだ板につかぬ。と、近くで有難くない

留守居の静寂を破る音がした。と思ふと何が辛いか如何にも悲しそうな顔はその極に達した。たゞいても間に合はぬ。大聲一番の連続。さあ困つた。誰かに

長野文庫

家で内を呼んで来て貰はう。子守唄だん／＼聲が高くなり

る。そして都會の生ちよるい青年に寄り添つてゐる愛人に對する怒りが、巖を嚙む波濤の如くにその肩へ表情を持たせたのは

何としても名演技であり、且つ効果的であつた。後姿は斯のやうに表情たつぶりである。萬一吾々が戀愛すれば、彼女の後姿によつて様々の

表情を讀みとらなければ、やがては失敗するであらう。即ち羞恥のためなれば、そつと優しく抱いてやる可きであり、拗ねた

場合は腋の下から擦る可し。何かを豫期しての後姿は躊躇なく突進すべきであり、そして眞實怒りのためなら、可憐な彼女の

肩には手も觸れず静かに頭を垂れて、後から眞實詫を乞ふ可きである。世の男性達よ、それら

その方法を一つだに誤つたら見せたがらないのである。萬一

も姉が確りして居るから) さて小生若き日大阪で某辯護士の書生をやつた事があるがど

うも昔から書生と留守居はつきものらしい度々留守番をやらされた或る時も留守中廣間で主人

のステッキをビユウ／＼振り廻して居た處急に駄がノメつて疊の眞ん中へステッキがブツリと

突つ立ち小生その始末に散々苦心しました。遂に疊を入れ替へ置き代へ穴のあいたのを隅の方

男性が、後姿を見せたとしたらそれは男性の碧を明け渡すやうなもので、よくせきのことでは

なければならぬ。たゞしかし男性にとつて、最後の一枚の切札のやうに、後姿から引出し得る

一つの表情がある。それは忍従の表情である。同情も憐憫も無いに拒絶する、嘲りも辱しめも

絶え忍ぶ男性捨身の抵抗は忍従の姿勢によつて次期の復讐を狙ふための後姿でなければならぬ

い。この表情は誰もが直に汲みとることは不可能である。まして女性など、男性のかう言つた後姿を理解するには餘りにお賢

おでん・ちり鍋

流 風

おでん 一福

大又長小せき

心話小い



武玉川三編研究

(三)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

く、只閃くのみ稻妻で、閑寂の草庵などの、秋夕の光景と思はれる。

東 魚 遠雷できこえぬ方が、此の場合趣が深い。蛭子氏も別に鳴つてゐるさなかに解されたのでもなからう。

(363) 一ツ穴からわひ言が出る

省 二 一ツ穴の貉だ。道楽は同類が欲しいもの、息子の同類に番頭がある。「調市も貉穴の言譯」(武十六)

秋の屋 貉とも狸とも云はぬのが、作者の味噌であるらしい。

東 魚 輕妙な句。「わび言が出る」もうま

(364) よそ目から案して貰ふ懸り舟

省 二 岸について居れば完全だが、碇泊中の懸り舟は、風浪の襲來などありはせぬかと、よそ目からは案じられるもの、鑿船は風情あるものだ。

秋の屋 私中は七の「案じて貰ふ」が好ましく無い。

東 魚 又纜したら、どんな風浪に遇はふもしれぬ、などと云ふ事を、よそ目の方がいつそ案じる事であると云ふ心持ちであらう。

(365) 鰯口の總名代にお乳の人

省 二 おちの人何萬石も膝へのせ。御無事御成育を祈り鰯口ならす總名代の役目は當然お乳の人にある。

秋の屋 「お乳の人」といふので、身分の有る家の乳母だといふ事が能く判る。

東 魚 華かな參詣の一群が想像されて、麗かな趣である。

(366) 鳴子引よその實を守りつめ

省 二 鳴子引は子供や老人などの仕事に多くはなつて居るが、實は仲々大切な業であるものゝ、やがては、そのみのりはよその物

(355) 打れる瀧をにらむ剛力

省 二 「瀧の調子の狂ふ荒行」をするのであるから、剛力も亦瀧をにらむで丹田に胆力を据えてかゝる。

秋の屋 剛力であるから、荒瀧に對して少し恐怖した態とも思はれる。「剛力」は修驗者に附隨する下男をいふ。

東 魚 「にらむ」は恐怖した心持ちとも思はれぬ。山伏に隨つて荷などを負ひ歩くので、勇健な人物であるから、寧ろ瀧を恐れぬ心持ちかと思ふ。

(356) 仲人か来れば娘は針を取

省 二 早速針をとつて、仲人と母親の相談話を聞かぬ振りで耳をそばたてるのも娘心。一生の大事ではある。下五を「お茶をくみ」とするよりは、針をとる方がおとなしい。

秋の屋 娘の心茲にあらず、針を取る手も上の空であらう。

東 魚 感心にお針をしてゐるといふ處も内々見せたいのだらう。

(357) 寶引繩の表奉公

秋の屋 大名屋敷の奥殿などで、寶引をす

る時にその繩を持つ者は、女中のなかでも表立つて、衆人に知られたものだ、といふのではない歟。

東 魚 寶引繩の當り外れのあるやうな表奉公と云ふ事ではないか。或は、イカサマのない正直な表奉公と云ふ意か。

(358) 大門で車一輛しかられる

秋の屋 大門外の高札の文には、「何者にやらす馬乗物醫寺院之外一切無用たる可し」とあつて、車の事は無いから、大方花魁が仲之町を道中する時刻に、大八車を引入れやうとした故、それを門内へ入れては悪いと叱つたのであらう。

東 魚 大門で車力が叱られてゐると云ふ様子が、一寸興があるが場合がなんだか想像出来ない。

省 二 さう、私にも判らぬ。車一輛の何にかを確かめたい。

(359) 旅衣工夫を頼む同イ年

秋の屋 可愛い子の初旅かなどで、同年の經驗ある友人に、旅装の相談を頼むものと思はれる。

東 魚 同い年と据えたのが、一寸十分吞

込めないが、元服前に一度伊勢へ参りたいと云ふ心持ちで、同年のものをもちて來たのかと思ふ。

省 二 お伊勢参りの話が引用されたが、例へば娘さんなど厄前に參詣したもので、同年のお友達に旅装等につき相談をし考へ工夫して貰ふ。

(360) 有たけの姿を作る願ほとき

秋の屋 何かの願解きに、自分の有る限りの衣服を着て、盛装するとも云ふの歟。

東 魚 願が叶つてみれば、御禮參には出来るだけ盛装して行く心持ちも尤である。

省 二 歡喜と有難さに充ちた様だ。

秋の屋 林間燧酒焼紅葉の意を含むのである。

東 魚 繪畫的な趣はある。「煙」をケムと讀ませるのは、俗すぎやしないか。

省 二 「氣の付ぬ」が考へさせられる。

(362) 稻妻遣入窓に念佛

省 二 様をつける雷の先驅が稻妻だから、やはり心地よひものではない。稻妻が窓にみゆる心淋しさに、お念佛となる。

秋の屋 此の稻妻は、雷鳴の時のものでな

となつてしまふ。

秋の屋二鳴子引は地主の家族でも雇人でも「よその寶」といふのは少し變である。

東 魚二實れば他人の收穫になつてしまふのを、人の寶と云つたのであらうが、ちと洒落がうまく、イヤミの方に響くやうに思ふ。

(367) 雨まで響て戻る 仲人

省 二二「仲人は雨までほめて歸るなり」(古川柳)。「雨乞をして歸る仲人」(武十三)。婚禮當日の雨は和合の兆といふ。降込める謂から。「戻る」が「歸る」となつて十六編に出づ。

秋の屋二平淡な句で面白味がない。

東 魚二こんな句は矢張り前句工合で面白味も出るのであらう。

(368) 顔上て空を伺ふ出かし口

省 二二「出かし口」とは何んの意なりや。出來齋なる言葉から察するに、明日は晴だとか雨だとか、したり顔に口を出すのではなきか。

秋の屋二此の「出かし口」は、見聞した事のない言語で、何とも解釋に苦しむ。

東 魚二「出かし口」は分らぬが、案ずるに、事の將に成就せんとする時の意かと思ふ。天を伺ふ處に、今一とイキである事を祈るやうな氣分も考へられると思ふが如何であらう。

(369) ○かあれは生て喰れる春の海

省 二二好きな句の一つ。言ふ事が大きい。春の海に對し明朗な感じだ。

秋の屋二生で喰れるは、奇抜過ぎるやうに思はれる。

東 魚二奇抜な云ひ方をした處に、作者の味噌があらう。

(370) 子共か持て遊ぶ錦木

省 二二錦木も子供の玩具となるのでは、

吉事ではない。

秋の屋二子供に玩具とされる事もあらう。此れは採り入れられない錦木である。

東 魚二錦木を立てた本人がみたら、贈落する事であらう。可笑な趣である。

(371) なまりふし若葉の中に哀也

省 二二若葉といへば、初鯉に布子一枚となつてしまふのに、同じ鯉で製した生節では、江戸ッ子に見向きもされぬ。哀なりである。

秋の屋二生節に同情? したのは面白い。若葉が能く利いてゐる。

東 魚二奇抜な句である。哀也は面白い。

(372) 近付の名のかはる演菰

省 二二この演菰も二篇の「野郎に成て歸る演菰」の伊勢關ならむ。宗因に「松坂の人に」として「演菰の音つれまねく尾花かな」とか、蓼太も「伊勢の人をいたむ」と前書して「演菰の友片われし便哉」と詠むで居る。「近付の名」も亦友達。

秋の屋二此れも伊勢の商店である。

東 魚二伊勢出の人が、何吉から何兵衛とでもなつたのであらうが、芦と云ふ名で聞かれてゐたのが、こゝでは演菰と云ふとの心持ちを、陰に匂はしてゐると思ふ。

(373) 仲人の器量か能て片たより

省 二二仲人の器量に對し彼氏のそれは、隨分と落ちるのであらう。爲に先方から更に回答がない。

秋の屋二雉子の頼使たよりで頼みにならぬ仲人である。

東 魚二仲人の方がよほど器量がいゝ、何だ馬鹿々々しいと云ふ氣分もされやう。穿味の句。

(374) 鯉の靴の多い日暮里

省 二二鮎賣根津へなぐ擔込みの如

く、日暮里へもへなぐ鯉を持込むのであらう。別の話であるが、日暮里には寺院多く其庭は草木の花眺めよかりし爲遊覽者があつた。「春の日の永きを覚えぬも此里の名におへるものならん」とある。

秋の屋二花見寺と稱された、日暮里の妙隆寺も今では何處へか移轉して、來春には其の跡へ小學校舎が建築されるはずで、昔のやうな閑靜の土地ではなく成つた。(此處から私の宅までは一町ばかりである)

東 魚二へなぐの鯉を擔込むと云ふ方より、生きの良い鯉を了解してくる對手がない。鯉にして恥多しであると嘆じた洒落氣分で一意思と思ふ。

(375) 袖留てからよく夢を見る

省 二二振新から袖留に昇級する。袖留になつてから色々夢をみる。あの世界の女らしくなるのか。

秋の屋二袖留は遊女ばかりでなく、總ての女子が成人すると、長い袖を短い袖にしたもの故、漸く婚期に近づいた娘が、様々な夢を見るといふのであると思ふ。

東 魚二小唄に、娘が袖を留めたのを、どうも素的だと云ふと、娘が「こちらもと又他の方の袖をあげてみせると云ふのがある。新造に限つた事はない。

省 二二いかに、限る要なかりし。娘の方が適切だ。

(376) 辛味大根をくばる小原女

省 二二辛味は形鼠の尾に似て居るから、一名鼠大根。味が辛いから薬味用。京阪地方に産した。大原女の配り物としての辛味大根は相應はしい。辛味の産地に就ては和漢三才圖會にも記載あり、風俗文選の蕎麥切頰に「伊吹をば天下にかくれなければ、からみ大根又此山を極上とさだむ」とあつて、爲に伊吹大根とも云ふ。閑田次筆に「此比近江伊吹

山の蘿蔔を得たり、象圓に根の末の細き尾の如くなれば、鼠大根と稱す。此物培養尿尿の力を借らず、自然生にして辛辣比類なく調味を好む人は大に賞翫す。然るに船をもて他方に送れば氣味大に減ず、陸路にては本のまゝなりと云へり、これ水氣に觸るゝ故なるべし。」

秋の屋二辛味大根は前解に盡きてゐるが、如何なる場合に、これを大原女が配るの歟。小原女は大原女の誤であらう。

東 魚二たゞ素朴な贈物を持つて來る處が大原女にふさはしいと見るべきか。

省 二二大原は一名小原と云つた。故に古書に小原女と記された例は多い。

(377) 鍋ふたて蚊やり押へる八重葎

省 二二蚊遣のために、蚊やり木や葉をくべた。不用の時鍋ふたで押さへて消す。八重葎生活の一情景。(子供の時よくやつた)

秋の屋二貧居の態で面白い句と思ふ。

東 魚二パツと燃え上つたので、鍋蓋で押へてくすべるので、消してしまふ場合ではない。

(378) 住吉は草へはね出す膳の露

秋の屋二此の住吉は、佃島の住吉神社で、毎年九月廿八九兩日に祭禮があり、同月末日には名越杖を執行されるから、この二つの行事の一つを詠むだものと思ふ。何となく涼味の溢れる句である。

東 魚二生きた魚を神に供へたのが、魚がまだ尾など動かすので、その雫が草の上へとんだと云ふのか、草へと云ふから、假に造つた野分の祭壇かと思はれる。

省 二二佃島とは思つたが、場合が判つきりしなかつた。私には難句の一つだ。

武玉川(前號)正誤表

頁 二 段 行 誤 正
一 九 椰 偷 偷



募集句

一路集

化粧

かほる選

大阪の夜が戀しい厚化粧
薄化粧うつむき勝に茶をすめ
化粧した顔に慣れてる寫眞班
快よく待たう外出への化粧
フラツパー同志化粧のうまが合ひ
化粧した顔が立つてる戎橋
ハイカラな男化粧を吐つてる
ドーランの似合女給の眉細し
つき出しを出して一刷毛はいて來る
女の子化粧がすむさちすまし
念入れた化粧へ顔をのぞかれる
目のさめる化粧八重垣姫で出る
挨拶のすむまで化粧崩すまい
大市の障子が開いた薄化粧
婚約を否定してゐる薄化粧
化粧して今日は名取の會へ出る
(人)颯爽ミ化粧室から出た自信
(地)嫁ぐ日の化粧は人にまかせてる
(天)十八の化粧に春の陽が當り

寫眞機

柳路選

看護婦ミカメラに入る傷が癒え
カメラ提けて出た日曜日雨になり
ピント合す間を母は堅くなり
ライカーへ腕は兎に角撮つて見る
寫眞機を賞めて常着の儘撮らし
決死隊笑つてカメラの前に立ち
寫眞機へさかさに寫る富士の山
寫眞機が僕の個性を知つてゐる

水客 雪春 文庫 曉明 大口坊 風葉 香月 旅人 曉童 一柳 悠起 鏡水 市太樓 潮花 同花 同花 葉光 沒子 九呂平

葉光 柳 一 水 鴨 水 一 葉
潮 旅 鴨 水 一 葉
い 潮 旅 鴨 水 一 葉
づ 花 人 ト 路 哉 柳 光
む 花 人 ト 路 哉 柳 光



リ・う・か・

催

う・ぼ・ん・て・い

▼川柳雜誌社九月句會は川柳忌句會と併せて戰死柳友慰靈祭を清水町の誓得寺に於て開かれた。參會の柳友諸君は戰死者の澄田羅門、島紅石、箱守糸柳、横川曲豐の四君の靈に心からなる祈りを捧げ、讀經のうち、焼香をした。

尙當日は「命日」その他の本催にふさはしい兼題席題があり又、西田柳樂氏の柳話「初代川柳翁について」があり、十時散會した。

▼松坂俱樂部趣味道場の路郎川柳講座は路郎主幹北支及蒙黨方面旅行のため、西田柳樂氏が代つて九月十八日午後一時より開講した。

▼友恒俱樂部友恒川柳會では路郎主幹北支蒙黨地方旅行に際し備後野村ビルの同俱樂部に於て送別句會を開催、佳吟續出の裡に閉會した。尙二十八日の第二十二回例會は路郎主幹旅行のため、西田柳樂氏が代講された。

創刊

▼撫順川柳社(撫順)では創立十周年記念特輯號として「川柳琥珀」を發行された。同誌は第一巻第一號としてあるが、出版法届出に不備の點があつた爲で實は既刊四冊の續誌で第一巻第五號に相當する譯である。なかに立派記念號で内容盛り上つてゐる。

▼東京毎夕新聞「川柳欄」の



酒清



伊藤裕天君等の手によつて毎夕川柳同志會が創立。機關紙として「毎夕川柳」が創刊された。多幸を祈る。

消息

▼路郎主幹(川柳雜誌社)は北支、蒙黨方面へ川柳行脚並びに文化視察のため、九月十八日神戸出帆黒龍丸で一路、天津に向はれました。當日、里十九、潮花、いわを、塊人、百雷、柳秀、青兒、丹路、夕鐘、かほる、鮎美、形水、豆秋、紫香、夢裡、綠雨、美奈子、靜江、ライト、田中、大澤、福田、麻生、原田、葎乃、アキラの諸氏の盛大なる見送りがあつた。

▼不朽洞會(大阪)では九月十六日夕八時より南區疊屋町カナメ食堂に於て路郎主幹、北支蒙黨方面旅行に際し、その壯行會を催した。

▼濱田久米雄君(廣島)は九月十七日、倉敷中央病院に

野田昇玉君を見舞はれ、翌十八日には岡山陸軍病院へ入院中の大森千代香君を見舞はれた。大森君は非常に經過良好で退院を目前に控へて第一線を脱んでゐられる由、多忙な中を柳友の爲にさかれてゐる。久米雄君の友情に同君の柳友達も大いに感激してゐる。

▼九月二十一日大連埠頭より川・雜路郎主幹を迎えての寄せ書を頂いた。啞三味君の「今御主人を迎えて、氣焔を聞いてみます」三福君の「隣り村に往かれる如き氣易さで着連されました」老頭兒を迎える老頭兒「その外、月南、兩人、佛心、松葉、兩明、南九、諸君の署名と路郎主幹の「少し酔つたネ」と云つた型の字があつた。

▼福田山雨樓君(横濱)は九月二十三日川柳翁の墓參の爲、淺草、龍寶寺に行かれ

て「今年の當方での集りは少く、周魚、五花村、陣居氏等としみじみ語つてゐます」とのお便りを頂いた。

▼多田市多樓君(下關)は急用にて九月二十七日、四國高松へ上陸、急用をすまされ、屋島へ向はれた。一出來得たなら更に足を伸ばせて今治に行き、柳石、心府文庫、曉童の諸氏に御目通りしたいと思つてゐる。」と云つて來られた。又門司にて折柄渡支中の路郎主幹にお會ひになつた由。

▼川・雜北大阪支部句會では九月十一日刻より玉出一笑居に於て第一回句會を開催した。當日の寄書には、一笑、紫香、須美萬的、風葉、潮花、波那子、一波、紅多呂、秀女、水客幸路、諸君の名が見えてゐた。

▼川・雜廣島支部(廣島)より九月例會の二十三日、大阪より万の氏を迎へての句會寄せ書を頂戴した。

各地柳壇

投稿規程

- 一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
- 二、文字を正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月廿五日とす
- 五、投稿先は本社宛

川・維川柳忌句會 (大阪)

川柳雜誌社年中行事の一つとしての川柳忌句會と同時に川柳人協會では聖戰に参加され、壯烈な戦死を遂げられた、柳友澄田羅門、横川曲豊、島紅石、箱守糸柳の四君の靈を慰むる爲、九月二十一日夜六時半より清水町誓得寺に於て柳友諸氏が讀經のうちに焼香。秋風もまだ眞新らしきお寺で一宵を過した。

(出席者名順不同)

紫香、雪春、楠美、愁花、水客、ライト、變人、艸榮、里十九、八歩、夕鐘、潮花、呑水、孤蓬、夢裡、かほる、豆秋、アイト、アキラ、青兒、沐天、綠水、ひろみ、斗風、鮎美、白柳子、霞乃

兼題「命 日」

かほる選

命日を寺に遊んで暮れかゝり 變人
命日へ兄妹無事な顔を見せ 紫香
命日に息子の自慢話も出 愁花
いとほんもほんにくと御命日 夢裡
命日の今日も朝から雨が降り 里十九
命日へ男は少さう座つてゐ 同
二人共お経は知らぬ御命日 豆秋
地下鐵でまつすく歸へる川柳忌 斗風
命日へ死目に逢はぬ愚痴も出る 霞乃
御命日乞食の数が多くなり ไลท์

命日にお祖母さんから叱られる 青兒
命日に母と娘が淋しまれ 同
命日の疊のシミがしたしまれ 八歩
御命日運は雷のまゝですみ 潮花
市場から花屋へ廻る御命日 艸榮
線香が眞つ直ぐに立つ御命日 白柳子
命日へ好物なりしものを盛り ไลท์
命日やけれどと母は蟹を買ひ かほる

席題「献 金」 鮎美選

献金の朝の祈りのつゝましく 沐天
献金に行く足元の釘を留め かほる
土砂降りのなかを献金して歸り 水客
献金を勝ち氣な姉が持つて行き 夕鐘
献金の強さは小さい手と手 青兒
献金をした喜びの夜のかべ 變人
献金に親子そろへの紋で来る 沐天
モンペを着て献金へ気がそろう 呑水
献金の相談がある合歡の下 白柳子
献金の中に知人の名を見つけ 水客
献金のほど遠からぬとこに住み 鮎美
献金に池をまはつて登りゆく 同

席題「ポスト」 沐天選

集配人我子の様にポストあけ 孤蓬
ポストにも氣乗しそふな文のなか 同
書き足らぬ事ポストの音で知り 紫香
ポストポスト下手な文字だと笑ま 夕鐘
ポストにも處女のポーズを失はず 同
いゝ手紙ポストへ傘をきせて入れ 水客
近ずけばポストのかけへ脊を見せ 同
吉日の朝のポストに用があり 八歩

街の子の玩具になつてゐるポスト かほる
頼むよとポスト拜んだ十二月 夢裡
待たされてポスト汚ないと思ひ 白柳子
ポストに投げて着く日の指を折り 變人
ポスト迄はなをゆるい宿の下駄 艸榮
名月にポストの影も立つてゐる 鮎美
朝の街ポストはしゃんと立つてき 同
喫茶店ポストが見えて畫さがり 同
折靴ポストもはげたなと思ひ 同
ポストたしかに引受けた音を立て ไลท์
友情をポストの中へ入れて去に 潮花
戦死者の便りも聞いた赤ポスト 青兒

席題「國 産」 八歩選

國産は國産らしい名で賣られ 艸榮
國産に廳舎の朝は色彩られ 青兒
國産で出来てゐますと並べられ 紫香
國産機中支の空をせまくする 呑水
國産と云ふ洋服が値頃なり かほる
國産と駄目を押されて買はされる 變人
國産がはばをきかせる店にかへ 同
薬局も國産品で感つてくれ 豆秋

席題「眉」 霞乃選

描眉毛男の心知つてゐる 紫香
眉刺つた四十の後家の美しさ 同
引眉毛ちとむかついた動きやう ไลท์
誘惑をぬけて歸つて眉細し 水客
かき眉の妓にきかされる愛國譜 呑水
つけ眉は眉の子供とそろへにて 孤蓬
誘惑に負けて淋みしい眉をひき 潮花
糸ほどの眉がみだらな日のマダム 沐天
文樂の眉はパチパチ音がする 豆秋
(人)眉美しきふるさとの朝の水 鮎美
(地)非常時を乗切る眉の一文宇 變人
(天)み佛の眉にゆとりを取り戻し 八歩
(軼)嬉しさの女は眉を少しあげ 霞乃

席題「木 魚」 互選

叩かれる度に木魚はむきを變へ 紫香
軒下を借れば木魚の音が聞え 同

川 梅田支部句會 (大阪)

水谷鮎美報

澁柿をちぎりし日もある一茶さん 鮎美
澁柿でもいゝから取つてくれ云ひ 春月
出征へ稻ととんぼへ陽がたかし 鮎美
故郷では今頃稻を蒔るじぶん 春月
百姓のくわえ煙管へ稻の風 同
十二時を過ぎてさびしいネオン街 夕人
日章旗銃後の僕も持つてゐる 斗風
夏祭銃後の空が晴れてゐる 鮎美
墨根あざやかに銃後の文字を書き 同
手の垢をじつと見つめる水枕 秀峰
湯の宿に垢をおとした一人旅 斗風
夕顔の傍で子の垢すつてやり 鮎美

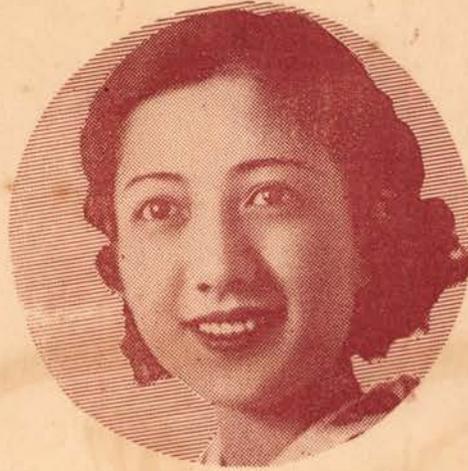
綴方教室観賞會

雨だれの音が貧乏に聞えてる 竹光
弟をよろこばしめる灯が暗らし 鮎美
父も子も鶏の殺されるのを見る 同
綴方教室から出る貧しき子 同
出征皆見一男君歡送會

聖戦へ君を送つて陽がきつい 翠陽
乾杯へ彼の女の眸ぬれてゐる 斗風
應召の頭感謝の臈が揃ひ 由布
祝杯のまつ日の丸の置きどころ 靜波

にきびとりに

美^び顏^が水^す



ニキビ

美容薬こそしても

ニキビ吹出物に非常によく効きますので
 大評判の薬です。ぜひお勵めしたい薬!

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるとても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスツキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫でカユイ時にもとても便利な薬!

吹	に	此
出	ぜ	薬
物	ヒ	を

化粧用 美顏水

ア	の	粧	最
ブ	お	下	適
ラ	化	に	!
顏			